

通級指導教室の開設に伴う運営上の課題に関する考察

——通級指導担当教員へのアンケート調査から——

Survey on Operational Issues Associated With Opening Resource Rooms
— From a Questionnaire Survey of Teachers in Special Support Services in Resource Rooms —

安里 健志
YASUZATO Takeshi

I. はじめに

文部科学省（2024）の調査によると、令和4年度に「通級による指導」（以下、通級指導）を受ける児童生徒数が過去最多を更新した。

通級指導を受ける児童生徒は、通常の学級に在籍し、その指導時数は限定的である。また、通級指導は自校で受ける自校通級だけでなく、他校に児童生徒が出向いて指導を受ける他校通級、他校に通級指導担当が出向いて指導を行う巡回指導があるなど、その役割や運営方法は地域や学校によって異なっている。そのため、特別支援学級と通級指導は制度的に異なるが、「両者の機能や役割分担が教育現場で十分に理解されず、混乱が生じている」との指摘もある（石田・北島・宮寺・真鍋, 2019）。

そうした中ではあるが、通級指導の需要の高まりを受け、各地で新たな通級指導教室の開設が急務となっている（松本・石崎・田中, 2019）。しかし、その運営には指導内容や教員の専門性、保護者との連携など多くの課題が存在している（伊藤・柘植・梅田, 2015；杉瀬・川崎, 2014）。特に、新たに通級指導教室を開設する際の担当教員の負担は大きいことが指摘されている（佐々木・武田, 2012）。

先行研究では、通級指導教室の運営全般（笹森・大城, 2014；文部科学省初等中等教育局特別支援教育課, 2020）や設備（大塚・石田, 2013）に関する知見は存在するが、開設期の課題に焦点を当てた研究は少ない。そのため、通級指導教室の開設における運営上の課題を明らかにすることは、今後の設置において重要であると考えられる。

II. 目的

本研究は、通級指導教室の開設に伴う運営上の課題を整理した上で、担当教員の負担を軽減し、通級指導教室を円滑に開設するための方策について考察することを目的とする。

III. 方法

1. 対象

2022年、Y県難聴・言語・発達障害教育研究会に所属する通級指導担当教員83名を対象とした。同研究会は、Y県内のほとんどの担当教員が所属しており、県内の実態を把握するために適切だと判断した。

2. アンケート調査項目

アンケート調査項目は、「奈良県の通級の先生と共に子どもの学びに活かすハンドブック」（奈良県教育研究所, 2019）の「1-4 通級を設置するに当たって（準備すること）」を参考に作成した。このハンドブックは、教室設置の準備段階から運営に至るまでの具体的な項目を網羅しており、開設時の課題を多面的に捉えるための枠組みとして適切であると考え、これを基に必要な項目を抜粋し、再構成した。

項目は、①プロフィール、②開設経験の有無、③開設時の通級指導経験の有無、④開設の際に困ったこと、⑤困ったことの詳細、⑥最も困ったこと、⑦設置マニュアルの有無、⑧設置マニュアルの必要性、⑨開設に関する自由記述とした。

3. 調査および分析方法

google フォームを用いたオンラインアンケート

ト調査を実施した。量的データは単純集計を行い、自由記述などの質的データは、筆者(教員歴13年、通級指導歴3年)及び研究協力者(教員歴20年以上、通級指導歴7年)がKJ法で分析した。具体的には、自由記述の回答を個別の付箋に書き出し、内容の類似性に基づきグループ化し、それぞれグループを代表する小項目、さらにそれらをまとめる大項目を設定するという手続きを行った。意見が異なった場合は、両者が納得するまで協議を重ねた。

4. 調査期間

調査期間は、2022年の6月～8月とした。

5. 倫理的配慮

Y県難聴・言語・発達障害教育研究会会長の許可を得て実施した。対象者には、研究目的、匿名性の担保、回答の任意性などを文書及び口頭で説明し、同意を得た上で回答を求めた。

6. 結果

(1) 対象者の属性

83名に調査依頼を行い、有効回答数は45名だった。回収率は54.2%だった。

内訳は、小学校所属が37名(82.2%)、中学校所属が6名(13.3%)、義務教育学校所属が2名(4.4%)だった。教員歴は、0～5年未満が1人(2.2%)、10年以上15年未満が10人(22.2%)、15年以上20年未満が6人(13.3%)、20年以上が28人(62.2%)だった。通級指導の経験は、0～5年が32人(71.1%)、5～10年が8人(17.8%)、15～20年が3人(6.7%)、20年以上が2人(4.4%)だった。

(2) 開設に携わった経験の有無

通級指導教室の開設に携わった経験について回答を求めた。その結果、「経験あり」と回答した教員は45名中24名(53.3%)、「経験なし」と回答した教員は45名中21名(46.7%)だった。

(3) 開設時の通級指導経験の有無

通級指導教室の開設に携わった経験のある教員

24名を対象に、開設時に通級指導の経験があったかどうか回答を求めた。その結果、「経験あり」は5名(20.8%)、「経験なし」は19名(79.2%)だった。

(4) 開設に携わった教員の困難さ

通級指導教室の開設に携わった経験のある教員24名に、開設の際に困ったことがあるかどうかについて、4件法【**そう思う**・**ややそう思う**・**あまりそう思わない**・**そう思わない**】で回答を求めた。その結果、18名(75%)が「**そう思う**」、3名(12.5%)が「**ややそう思う**」、1名(4.2%)が「**あまりそう思わない**」、2名(8.3%)が「**そう思わない**」だった(表1)。

表1 困ったことについての有無

	そう思う	ややそう 思う	あまりそう 思わない	そう思わ ない
小学校	14	3	1	2
中学校	2	0	0	0
義務	2	0	0	0
計	18	3	1	2

(n = 24)

また、通級指導教室の開設の際に困ったことがあると回答した教員21名に、多項選択法及び自由記述にて回答を求めた(表2、表3)。

最も多かったのが「b. 施設・設備」で、18名(75%)が回答した。理由として、予算的な問題、使用教室の問題などが挙げられた。

2番目に多かったのが「c. 就学相談及び指導する児童生徒の決定」で、15名(62.5%)が回答した。理由として、知識や経験の不足、入級基準等のシステムに関する問題、保護者への伝え方などが挙げられた。

3番目に多かったのが「a. 備品・教材」で、14名(58.3%)が回答した。理由として、予算の問題、備品に関する問題、予算決定の時期などが挙げられた。

4番目に多かったのが「h. 校務分掌・会議や行事の参加」で、11名(45.8%)が回答した。理由として、会議に参加できない、部活や校務分掌の問題、通級指導担当教員の位置づけがあいまいで

表2 開設の際に何に困ったか（複数選択）

	小学校	中学校	義務	計
a. 備品・教材	12	2	0	14
b. 施設・設備（教室環境等）	14	2	2	18
c. 就学相談及び指導する児童生徒の決定	11	2	2	15
d. 初年度の予算	5	1	0	6
e. 校内の体制づくり	6	2	2	10
f. 管理職・教職員の理解	7	1	1	9
g. 個人情報の取扱等	2	0	0	2
h. 校務分掌・会議や行事の参加（含、部活）	7	2	2	11
i. 教育委員会等の関係機関との連携	3	1	1	5
j. その他	6	1	0	7

あることなどが挙げられた。次いで、「e. 校内の体制づくり」が10名（41.7%）、「f. 管理職・教職員の理解」が9名（37.5%）だった。その理由として、どちらも教職員の通級指導への意識や理解に関する課題が主に挙げられていた。

また、同じく21名に選択した中で最も困ったことについて回答を求めた。その結果、最も多かったのは「e. 校内の体制づくり」で、6名（25%）が回答した。2番目は、「a. 備品・教材」で5名（20.8%）が回答した。3番目は、「c. 就学相談及び指導する児童生徒の決定」で4名（16.7%）が回答した。

(5) 設置マニュアルについて

勤務校管轄の教育委員会に通級指導教室の設置に関するマニュアルがあるかどうかについて、選択式【はい・いいえ・わからない（見たことがない）】で回答を求めた。その結果、「はい」が12名（26.7%）、「いいえ」が11名（24.4%）、「わからない（見たことがない）」が22名（48.9%）だった。

また、勤務校管轄の教育委員会に通級指導教室設置に関するマニュアルが必要かどうかについて、4件法【そう思う・ややそう思う・あまり思わない・そう思わない】で回答を求めた。その結果、「そう思う」が36名（80%）、「ややそう思う」が8名（17.8%）、「あまり思わない」が0名（0%）、「そう思わない」が1名（2.2%）だった。

(6) 開設に関する自由記述

通級指導教室の開設に関する考えについて、自

由記述で回答を求めた（表4）。

「ハード面」では、「体制の構築」、「情報の共有・連携」、「教育委員会のバックアップ」、「予算」に分類した。教育委員会や他市町村との情報の共有や連携、予算面でのバックアップ、設置後のサポートが必要などの回答があった。

「ソフト面（校外）」では、「研修の充実」、「指導教員の複数配置」、「指導者の育成」に分類した。研修の充実や指導教員の複数配置、指導者の育成を望む回答が多かった。

「ソフト面（校内）」では、「通級指導への理解」、「特別支援教育への理解」に分類した。管理職を含む教職員の通級指導への理解や、ユニバーサルデザインの授業づくりなど特別支援教育そのものについての理解を求める回答が多かった。

「その他」の回答では、通級指導教室が増えること、とりわけ各学校に自校通級が設置されることを望む回答が多かった。

IV. 考察

1. 担当教員の指導経験との関連から

通級指導では、教員としてのキャリアが浅い中で意に反して担当者に指名されるケースも見られる（杉瀬・川崎, 2014）が、本調査では44名（97.8%）の教員が教員歴10年以上であった。通級指導担当教員は指導の専門性に加え、マネジメント能力やコーディネート能力が必要とされる（国立特別支援教育総合研究所, 2012）ことから、一定の経験がある教員が指名されており、またそうした教員が開設に携わっている現状は望ましいと言える。

表3 開設の際に困った具体的な事例

大項目	小項目	実際の記述
a. 備品・教材	予算の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・新設されたのに、予算が全くない。 ・学級費がないため、自費で購入している。 ・予算決定までの時間がかり、どれくらい購入できるのか見当がつかなかった。 ・児童の美観が把握できていないため、どのような教材が適しているかの判断が難しい。 ・開設されてから備品や教材を選んだため、授業開始がなかなかできなかった。
	教材選定の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・開設されてから備品や教材を選んだため、授業開始がなかなかできなかった。 ・立てつけが悪い空き教室を使っている。 ・カーテンや内線等、必要なものがなかった。 ・通常学級に隣接した教室を使うことになったが、音の刺激や人通りが多いため落ちつかない。 ・教室の場所を決めるところから始まったが、初めての担当一人に任せられて大変だった。 ・他校を一人て改造した。 ・他校の真似をしたが、一人で決めなくてはいけないことが多かった。
b. 施設・設備 (教室環境等)	設備の使いにくさ	<ul style="list-style-type: none"> ・通級担当者に任されて、どこで練習するかは個人のさじ加減のような状態である。 ・通級指導教室に入る基準や、そのためのアセスメントを行っていくことの難しさがある。 ・専門的な知識や経験が少ないために、迷いが生じたりや自信の持てないケースがある。 ・新設される可能性があることを保護者にも言えずに話し合いをもつことは、非常に難しかった。 ・実態把握、児童・保護者との信頼関係が未構築のまま、対象児童を選することはむずかしい。
	担当者による教室環境	<ul style="list-style-type: none"> ・教材などがほとんどない状態で、市からの予算だけで必要なものをそろえることは難しかった。 ・初年度は、一から全て揃えないといけないので、予算が足りなかった。 ・予算要求時期には開設が決定されていないこと。 ・初年度は、校内全体の普通の備品内の予算しかなかった。
c. 就学相談及び指導する児童生徒の決定	対象児童の見極め	<ul style="list-style-type: none"> ・通級の制度的な知識の無い方が多かった。 ・一人で考えることが多かった。 ・外部講師を招聘して研修をしたが、部活動などで4分の1以上の教員がいなかった。 ・小学校からの継続生徒はスムーズに時間調整を行えるが、新たな生徒への対応が難しい。 ・一貫校で学舎が2つあるため、1～9年生までの対象児童生徒の時間割の決定が難しい。
	知識の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・新設に係る説明の難しさ ・通級の制度的な知識の無い方が多かった。 ・一人で考えることが多かった。 ・外部講師を招聘して研修をしたが、部活動などで4分の1以上の教員がいなかった。 ・小学校からの継続生徒はスムーズに時間調整を行えるが、新たな生徒への対応が難しい。 ・一貫校で学舎が2つあるため、1～9年生までの対象児童生徒の時間割の決定が難しい。
d. 初年度の予算	予算の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・教材などがほとんどない状態で、市からの予算だけで必要なものをそろえることは難しかった。 ・初年度は、一から全て揃えないといけないので、予算が足りなかった。 ・予算要求時期には開設が決定されていないこと。 ・初年度は、校内全体の普通の備品内の予算しかなかった。
	予算の未計上	<ul style="list-style-type: none"> ・通級の制度的な知識の無い方が多かった。 ・一人で考えることが多かった。 ・外部講師を招聘して研修をしたが、部活動などで4分の1以上の教員がいなかった。 ・小学校からの継続生徒はスムーズに時間調整を行えるが、新たな生徒への対応が難しい。 ・一貫校で学舎が2つあるため、1～9年生までの対象児童生徒の時間割の決定が難しい。
e. 校内の体制づくり	職員を通級への理解の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・設置に積極的な校長が転動されたこともあり、管理職の理解不足を感じた。 ・学校自体も新設で各々の担当に手一杯な状態だったため、通級担当に任せたいという状態だった。 ・自分自身も通級教室への理解が不足しており、質問されても説明することが難しい。 ・甘やかさずある等の意見があり、理解を進めるまでに時間がかかった。
	時間割に関する難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・新設準備校での個人情報管理をどちらでどのようにするか ・指導記録のカルテはどうする？などの課題が浮上してきた。 ・休職した職員の教科指導の補充をしている。 ・巡回指導もしているが、立場があいまい。 ・学年所属、校務分掌などの配慮はあるが、中途半端になっている関りが多く、気を使う。 ・校内にいないことも多いが、校内の通常の学級に関する特支コーディネーターをしている。 ・部活の顧問をしているが、平日の参加が難しい。 ・部活動ははずらなくてもいいが、部活を持ちたい教員には不満となるだろう。 ・2学舎に別れているため、どちらに参加するべきか、どう関わっていいかわからない。 ・放課後指導の希望が多いため、会議に物理的に参加できない。
f. 管理職・教職員の理解	管理職の理解の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・設置に積極的な校長が転動されたこともあり、管理職の理解不足を感じた。 ・学校自体も新設で各々の担当に手一杯な状態だったため、通級担当に任せたいという状態だった。 ・自分自身も通級教室への理解が不足しており、質問されても説明することが難しい。 ・甘やかさずある等の意見があり、理解を進めるまでに時間がかかった。
	教職員の理解の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・新設準備校での個人情報管理をどちらでどのようにするか ・指導記録のカルテはどうする？などの課題が浮上してきた。 ・休職した職員の教科指導の補充をしている。 ・巡回指導もしているが、立場があいまい。 ・学年所属、校務分掌などの配慮はあるが、中途半端になっている関りが多く、気を使う。 ・校内にいないことも多いが、校内の通常の学級に関する特支コーディネーターをしている。 ・部活の顧問をしているが、平日の参加が難しい。 ・部活動ははずらなくてもいいが、部活を持ちたい教員には不満となるだろう。 ・2学舎に別れているため、どちらに参加するべきか、どう関わっていいかわからない。 ・放課後指導の希望が多いため、会議に物理的に参加できない。
g. 個人情報の取扱等	取り決めがない	<ul style="list-style-type: none"> ・新設準備校での個人情報管理をどちらでどのようにするか ・指導記録のカルテはどうする？などの課題が浮上してきた。 ・休職した職員の教科指導の補充をしている。 ・巡回指導もしているが、立場があいまい。 ・学年所属、校務分掌などの配慮はあるが、中途半端になっている関りが多く、気を使う。 ・校内にいないことも多いが、校内の通常の学級に関する特支コーディネーターをしている。 ・部活の顧問をしているが、平日の参加が難しい。 ・部活動ははずらなくてもいいが、部活を持ちたい教員には不満となるだろう。 ・2学舎に別れているため、どちらに参加するべきか、どう関わっていいかわからない。 ・放課後指導の希望が多いため、会議に物理的に参加できない。
	位置づけの曖昧さ	<ul style="list-style-type: none"> ・休職した職員の教科指導の補充をしている。 ・巡回指導もしているが、立場があいまい。 ・学年所属、校務分掌などの配慮はあるが、中途半端になっている関りが多く、気を使う。 ・校内にいないことも多いが、校内の通常の学級に関する特支コーディネーターをしている。 ・部活の顧問をしているが、平日の参加が難しい。 ・部活動ははずらなくてもいいが、部活を持ちたい教員には不満となるだろう。 ・2学舎に別れているため、どちらに参加するべきか、どう関わっていいかわからない。 ・放課後指導の希望が多いため、会議に物理的に参加できない。
h. 校務分掌・会議や行事の参加 (部活動を含む)	部活動の参加の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・休職した職員の教科指導の補充をしている。 ・巡回指導もしているが、立場があいまい。 ・学年所属、校務分掌などの配慮はあるが、中途半端になっている関りが多く、気を使う。 ・校内にいないことも多いが、校内の通常の学級に関する特支コーディネーターをしている。 ・部活の顧問をしているが、平日の参加が難しい。 ・部活動ははずらなくてもいいが、部活を持ちたい教員には不満となるだろう。 ・2学舎に別れているため、どちらに参加するべきか、どう関わっていいかわからない。 ・放課後指導の希望が多いため、会議に物理的に参加できない。
	会議への参加の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・休職した職員の教科指導の補充をしている。 ・巡回指導もしているが、立場があいまい。 ・学年所属、校務分掌などの配慮はあるが、中途半端になっている関りが多く、気を使う。 ・校内にいないことも多いが、校内の通常の学級に関する特支コーディネーターをしている。 ・部活の顧問をしているが、平日の参加が難しい。 ・部活動ははずらなくてもいいが、部活を持ちたい教員には不満となるだろう。 ・2学舎に別れているため、どちらに参加するべきか、どう関わっていいかわからない。 ・放課後指導の希望が多いため、会議に物理的に参加できない。
i. 教育委員会等の関係機関との連携	連携の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・担当部署がわからなかった。 ・予算や書類の仕組みが互いに理解できず、思いが噛み合わないかった。 ・運営が丸投げなので自分で動く、市が設置しており学校独自のものではない、と指導が入った。
	その他の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・提出書類が多い。 ・こちらから働きかけないと、教育委員会と話が進んでいかない。 ・通級指未設置校や、センター的役割の通級指導教室との連携の在り方について。
j. その他	その他の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・提出書類が多い。 ・こちらから働きかけないと、教育委員会と話が進んでいかない。 ・通級指未設置校や、センター的役割の通級指導教室との連携の在り方について。

表 4 通級指導教室の開設に関する自由記述

大項目	小項目	実際の記述（要約の箇所あり）
体制の構築		<ul style="list-style-type: none"> ・ 通級指導を経験された教員が新設の担当として一緒に関わってもらえるような体制であるとありがたい。 ・ 設置までだけでなく、設置後のサポートが重要。 ・ 市町村の状況によって必要事項や進め方が異なるので、継続して相談できる体制づくりが必要。 ・ 中学校の通級指導において、持ち時間数の少ない教科の教員が担当する仕組みを根本的に改めてほしい。 ・ 前年度から次の年度に通級教室を設置することを知らせ、準備を進めていける体制を作ってほしい。 ・ 他市町村の取り組みや体制の共有が必要。 ・ 指導内容の共有などが大きな課題。 ・ 成功談だけでなく、失敗談とその対応、解決策についてなど、実際の現場で起こりうることを共有したい。 ・ すぐに相談できる窓口的なものがほしい。 ・ 研究会等でサポートできるシステムなど、経験者がサポートできる体制ができるとよい。 ・ 新設に際してのマニュアルがあればよいと思う。
ハ ト 面	情報の共有・連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 成功談だけでなく、失敗談とその対応、解決策についてなど、実際の現場で起こりうることを共有したい。 ・ すぐに相談できる窓口的なものがほしい。 ・ 研究会等でサポートできるシステムなど、経験者がサポートできる体制ができるとよい。 ・ 新設に際してのマニュアルがあればよいと思う。
	教育委員会のバックアップ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 開設校の状況確認やサポートのための巡回アドバイザー等の機会があったらよいと思う。 ・ 教育委員会の担当者がわかっている場合もあるため、県が市町村に対して指導やアドバイスをしてほしい。 ・ 学校で通級担当者を決めることが必要条件になっているが、研修などの教育委員会のフォローがほしい。 ・ 予算に限りがあがるため、これから新設校が増えたら予算を分配していくことになるかもしれない。
	予算	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新設はいいことだが、そのための予算をしっかりと確保してほしい。 ・ 準備期間を設け、通級新設に取り組み教員や支援（人的、物的）をいただきたい。
	研修の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実際の指導場面の見学、教材や指導についての研修を受けたい。 ・ 通級担当は、指導力への不安を感じられる方は少なからずいると思う。 ・ 通級指導教室の指導の質を確保していくことが大切。 ・ 児童の実態に沿った学習を進められるよう、専門性をさらに高められるような手立てが必要。 ・ Z市では、新設や新規担当教員に対して既存の通級担当者が学校に出向き、週2日の兼務で共に指導している。 ・ 複数配置の学校が増えると、人材育成がしやすくなり、開設も進みやすいと思う。
ソ フト 面 (校 外)	指導教員の複数配置	<ul style="list-style-type: none"> ・ 巡回指導を通して、新設校への啓発のためのアドバイザーが必要。 ・ 私のように、複数配置の通級指導教室で経験を積んでから新設に関わらせてもらえる事が理想的だと思う。 ・ 担当者育成として、オンライン研修ができる体制ができると、通級担当を目指す人も増える。
	指導者の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校の通級教室が増えるよう、人の確保が必要。 ・ お金をかけて、時間をかけて、たくさんの人材育成が必要。 ・ 担当者のやる気や資質のみに期待している現在では、差が大きくなり、回り道だと思う。 ・ 指導者の養成が急務である。 ・ 県の研修に加え、市の中でも研修できる機会を設け、後継者育成を進めたい。

- ・管理職が通級指導教室をどれだけ理解して担当者をサポートできるか?にかかっているが、現状は難しい。
- ・管理職に、通級に対する深い理解をお願いしたい。
- ・担当できる人が足りない。通級指導がまだ知られていない。
- ・新設の際に、管理職や教職員が通級指導の理解を深め、学校全体で通級が必要だという思いがベースにあってほしい。
- ・通級指導について、多くの先生方に興味をもってもらい、やりがいを感じて希望する方が増えるといいと思う。
- ・転勤してすぐに通級担当になると、校内の先生方と関係を作る時間がなかった。学校を知った上で担当になると、やりやすいのではないか。
- ・全ての専門性を持つということではなく、通級指導を「やってみよう」と思えるように、役割を知ってもらってほしい。
- ・多くの先生方に通級指導教室の必要性を知ってもらい、色々な先生に関わっていただけたらいい。
- ・通級指導を知らなければ学力を補充する部屋で終わる。それが何より歯がゆい。

通級指導への理解

ソフ
ト面
(校外)

特別支援教育への理解

- ・新設する前にまず発達の特徴をどの先生方にも理解して頂かないと、作ったもののどのよう利用するの?となる。特に中学校では、教科で先生が変わるので特別支援教育とユニバーサルデザイン教育をリンクさせていかないと、支援学級にも通級にも在籍しない生徒は、取り残されてしまうのではないかと思う。
- ・「よそ事」ではなく「自分事」として全ての教員が自立活動の大切さを認識してくれたら、あとは教材費や設備面で行った環境の整備だけでよいと思う。
- ・高学年で子どもはクラスに複数いて通級指導での取り出しを受けている子どもだけではない
- ・通級の意義を職員全員が理解しないと、勉強がしんどければ通級にという流れになりかねない。まずは、教室での一次支援を考えるために、特別支援の視点を担う必要がある。支援方法を一緒に考えていくことも通級担当の職務ではないかと思う。
- ・特別支援学級在籍児童と通級指導教室児童とをどう振り分けたいか。ただ単に個別学習の時間を何時間と固定するのはどうかと思う。
- ・開室10年目の本校でさえも運営の難しさと孤独さを感じる中、新設校の担当が疲弊・辞易しいないか心配。
- ・各学校に通級教室が設置されることで子どもたちにとっても望ましい。
- ・少なくとも各学校に1教室は必要になると思う。
- ・指導の専門性よりも、まず居場所を確保することで学校の環境は大きく変わる。
- ・理想は自校通級。
- ・学校の現状として、各学校に通級教室はあるべきだと思う。
- ・各小中学校に通級指導教室が設置されることを望む。
- ・少なくとも各市町村に複数の通級指導教室を設置して、県内のどの子どもたちも通級指導を受けられる態勢を作ってほしい。
- ・各学校に一つずつ必要。支援学級と同じくこれらの必要性を感じている。通常学級の子どもたちの駆け込み寺的な場所として、大切な存在だと思う。
- ・専門性も皆無では困るが、それよりも子供たちの困り感を理解し、少しでも改善できるように一緒に考え、個別に対応できる場所を確保することが大切。
- ・予算や設備、教室等、いろいろと確保が難しい面も多いが、スペースと子どもと教師がいれば、まず、新設してみる、というスタンスも大切。予算面等、市教委であまり新設のハードルを上げると、通級の新設が進まないと考えられる。
- ・自校に通級があることが当たり前になってほしい。
- ・どの学校にも通級が設置されたら、放課後の時間の指導がないので先生方との連携が図りやすいと思う。
- ・保護者の負担も少なく、送迎ができないために通えない子どもにとっても自校通級が子どもにとっても一番良いのではないかと思う。

そ
の
他

一方、通級指導教室の開設に携わった教員のうち、19名（79.2%）が開設時にはじめての通級指導担当教員となっている。決してそれ自体が課題であるとはいえないが、経験豊かな教員でさえも開設に際してはさまざまな課題を抱えていることを踏まえると、学校内でのサポートに加え、既存の通級指導担当教員や教育委員会からのバックアップや連携は欠かせないと考える。

2. 通級指導担当教員が感じた困難さから

通級指導担当教員が感じた困難さとして、「b. 施設・設備」や「a. 備品・教材」など、運営のハード面に関する項目が多く選択されていた一方、「c. 就学相談及び指導する児童生徒の決定」、「h. 校務分掌・会議や行事の参加等」、「e. 校内の体制づくり」、「f. 管理職・教職員の理解」などのソフト面に関する項目についても多く選択されていた。このことから、本調査地において、通級指導教室の開設に際してはハード面だけでなくソフト面での充実が必要であることが示唆された。

特に、最も困ったこととして6名（25%）が「e. 校内の体制づくり」を選択していた。通級指導を進める上で、他の教職員の理解が重要であることは既に多くの研究で明らかにされているが（伊藤・柘植・梅田, 2015 他）、新たに開設される場合はその重要性がより高まると考えられる。そのため、指導者の育成も含めた教職員への研修の充実、学級担任への理解啓発を含めた通級指導に関する出前授業（横山・武田, 2015）などが重要だと考える。加えて、「通級指導の役割には、周囲児童生徒に対する障害理解教育が包含されている」（安里, 2024）ため、周囲の児童生徒に対する障害理解教育を充実させるとともに、学校全体や地域に対して通級指導に対する理解の醸成を図ることが肝要（伊藤・柘植・梅田, 2015）だと考える。

また、実務上の難しさとして、「開設される可能性があることを保護者にも言えずに話し合いをもつことは、非常に難しかった」といった回答があった。他校通級には送迎の問題などもあり、自校通級ができない場合は断念する（大塚・大川・清水・石川, 2017）ケースがあるが、自校通級を行うことを伝えることができれば通級指導につな

げられたケースもあることが推測される。人事や予算などのさまざまな課題があるが、次年度の通級の開設予定については、できる限り早期に決定されることが望ましいと考える。

3. 通級指導教室の設置マニュアルについて

45名のうち32名（71.1%）が、勤務校管轄の教育委員会に通級指導教室の設置マニュアルが「ない」、もしくは「わからない（見たことがない）」と回答したことは、上述した課題や困難さと無関係ではないと考える。

もちろん、マニュアルが「ない」と回答した場合も実際には市町村教育委員会にあたり、マニュアルがなくともシステム化されていたりする場合も考えられる。しかし、実際には回答者の44名（97.8%）、実際に開設に携わった教員に至っては全員が設置マニュアルの必要性を認めており、「通級指導教室の開設に向けてどのように進めていくかは教育委員会の裁量」（文部科学省, 2018）であることを踏まえると、「『通級指導教室の設置要綱』等を作成し、通級担当教員がどのような職務を担当するのか」（奈良県教育研究所, 2019）についてあらかじめ規定することは、1つの方略であると考えられる。

一方、例えば特別支援教育を行うための前提条件が十分でないへき地において、「『障害種別』で括られることは、孤立してしまう」（二宮, 2020）などの指摘があるように、通級指導教室の設置に関するマニュアル化を求めるあまり、児童生徒の多様な実態や地域の特殊性に応じた柔軟な対応が阻害される場合もある。

さらに、本調査はあくまで通級指導担当教員への調査に留まるため、管理職やその他の教職員の意見は反映されていない。通級指導は学校全体で推進する必要があることから、さまざまな立場からの意見を踏まえる必要がある。加えて、児童生徒及びその保護者の意見やニーズも重要である。そのため、本調査のようにボトムアップによる現状の把握を行い、関係機関が連携しながら柔軟な設置を行うことも重要であると考えられる。

4. 通級指導教室の開設に関する自由記述から

通級指導教室の開設に関して、ハード面では教育委員との情報共有や連携、予算のバックアップ、設置後のサポート体制の必要性が指摘されていた。大塚・石田(2013)の調査では、現状の通級指導教室で最も改善してほしい設備として「教材・教具」が選ばれていたように、通級指導教室開設後の運営にあたって必要不可欠なものを揃えるだけの予算的なバックアップが必要であることが改めて示された。一方、「経験者がサポートできる体制」、「通級指導を経験された教員が開設の担当として一緒に関わる体制」や「前年度から次の年度に通級教室を設置することを知らせ、準備ができる」体制を構築することで、これら課題に対応できる可能性も示唆された。それらが難しい場合、現在行われている巡回指導を充実させつつ校内通級の実施への足がかりを作る(今西・玉村, 2010)ことは、体制構築の1つの方策だと考える。

学校外のソフト面では、研修の充実や指導教員の複数配置、指導者の育成の充実の必要性が指摘されていた。特に、通級指導担当教員が十分な研修が保証されないまま担当者選ばれている(杉瀬・川崎, 2014)現状において、「担当者のやる気や資質のみに期待している現状」では、「指導力への不安を感じる」教員は必然的に多くなると考えられる。解決策として、「開設や新規の通級指導担当教員に対して、既存の通級指導担当教員が学校へ出向」くなど、On the Job Trainingを通して「通級指導教室の指導の質を確保する」ことの重要性が示唆された。加えて、「複数名配置の通級指導教室で経験を積んでから新設に関わらせてもらえる事が理想的」といった回答は、複数配置を行うことが指導者育成、新たな通級指導教室の開設への準備といった両面からも期待できる可能性が示唆される。既存教室に通級指導担当教員を複数配置することは、新たに開設を目指すまでの経過措置として有効な手立てだと考える。

ソフト面(校内)では、管理職を含む教職員の通級指導への理解や特別支援教育への理解が必要であることが示された。特別支援学級と通級指導教室の機能が十分に理解されずに混乱が生じており(石田・北島・宮寺・真鍋, 2019)、特別支援

教育そのものについての理解が不足している教員の存在(杉浦・武田・尾崎・増田, 2019)が指摘される中、通級指導が「学力を補充する部屋」や「勉強がしんどければ通級」と教員から誤認されている現状は同様の課題であり、通級指導担当教員の深刻な憂慮や苦悩がうかがえる。そのためには、「通級指導をやってみようと思えるように、役割を知ってもらっておく」ことや、「教室での一次支援を考えるために、特別支援の視点を担任がもつ」ことができる研修や制度を整えていく大切さが回答より示唆される。加えて、どれだけ設備や予算を整えても徒労に終わる可能性があるため、「何より管理職や教職員が通級指導の理解を深め、学校全体で通級が必要だという思いがベース」にあり、その上で開設されることが望まれる。ただし、子どものニーズを優先すべきであることは言うまでもないが、人的環境が得られない中での授業や基礎的環境整備や合理的配慮を実施する通常の学級担任の難しさ(樋口・林田・河原・新海, 2021)は、十分に考慮する必要がある。そのため、授業研究などを通して積極的に教室を公開していくことで、教職員の通級指導教室への理解啓発につなげる(佐々木・武田, 2012)などは重要だと考える。

その他では、「理想は自校通級」、「自校に通級があることが当たり前になってほしい」など、主に通級指導の増設への意見で構成された。通級指導においては、発達障害等の診断を受けていない児童生徒も多く指導が行われている(国立特別支援教育総合研究所, 2012)、他校通級は自校通級に比べて障害の診断を受けている児童生徒の割合が高い(山本・小野, 2013)場合もあり、通級指導につながるハードルが自校通級に比べて高くなっている可能性がある。その点、自校通級は送迎の必要もなく、また環境調整や連携がスムーズに行える(伊藤・柘植・梅田, 2015)などのメリットを有することから、各学校に設置される意義は大きいと考える。一方、「予算面等、あまりハードルを上げすぎると、通級の開設が進まない」といった回答があった。全ての課題をクリアした状態で開設することは理想的であるが、「子供たちの困り感を理解し、少しでも改善できるように一

緒に考え、個別に対応できる場所を確保」することや、「スペースと子どもと教師がいれば、まず、開設してみるというスタンス」をもつことも、場合によっては必要だと考える。

最後に、「開室10年目の本校でさえも運営の難しさと孤独さを感じる」といった回答は、本報告の趣旨を体現している。通級指導の運営においては、担当者個人の負担感に基づくことから担当者自身からは声をあげづらく、十分な対策を立てられないままになってしまっている部分がある（杉瀬・川崎, 2014）ため、通級指導担当教員の願いとして課題を受け止めることが必要である（杉浦・武田・尾崎・増田, 2019）と考える。

V. おわりに

1. 本研究における結論

本研究は、通級指導教室の開設期に担当教員が直面する運営上の課題を調査し、考察を行った。その結果、教室や備品といったハード面の課題と同時に、教職員間の理解醸成や協力体制の構築といったソフト面の課題が、担当教員にとって大きな困難となっていることが示唆された。

特に、通級指導の経験がない教員が開設を担うケースが多く、体系的なサポート体制の不在が困難さを増幅させている構造が浮き彫りになった。通級指導においてはその役割と共に業務の負担を考える必要があるため（平岡・小野, 2020）、担当者のみに任せるのではなく、関係機関と連携をして円滑に開設できるような仕組みやバックアップの体制を整えていくことの重要性が示唆された。加えて、通級指導の設置マニュアルの作成だけでなく、複数配置による指導者育成、巡回指導を通じた助言（国立特別支援教育総合研究所, 2012）など、地域の実態に合わせた特別支援教育や通級指導の在り方を総合的に検討し、開設の準備を行う必要性も示唆された。

2. 本研究の限界

本研究はY県の教員のみを対象としており、その結果を一般化するには慎重な検討を要する。また、回答者に小学校教員が多く、プロフィールとの相関関係までは分析できていない。中学校や

義務教育学校の状況を十分に反映できていない可能性があり、校種間での差異についても言及できなかった。

加えて、本調査は通級指導担当教員の視点のみについて分析している。特に、自由記述の質的分析に際しては、筆者と研究協力者の2名で分析を行うことで、恣意的な解釈を排し、記述内容を忠実に反映させるよう努めた。しかし、データの解釈およびカテゴリー化の過程において、分析者の経験や視点が介在する可能性を完全に排除することは困難である。そのため、本研究で得られた結果は、必ずしも回答者の意図の全てを網羅的に反映できていない可能性がある。

したがって、本調査で示された課題やニーズは、あくまで通級指導担当教員の認識に基づくものであり、学校長や他の教職員、教育委員会の認識とは異なる可能性がある点を考慮する必要がある。

3. 今後の課題

今後は他都道府県での比較調査や、管理職、教育委員会を対象とした調査を実施し、より多角的な視点から課題を分析する必要がある。また、通級指導経験の有無や経験年数などとの相関関係についてもさらなる詳細な研究が必要だと考える。

さらに、本稿で示唆されたような課題の解決につながる円滑な開設に成功した事例を収集し、分析することも有益であると考え。それらの知見を統合することで、全国の通級指導教室の円滑な開設、ひいては特別支援教育の充実に期待したい。

付記

本報告は、日本LD学会第32回大会（広島）で発表した内容について、発展させたものです。

また、本調査にご協力いただきましたY県難聴・言語・発達障害教育研究会の会員の皆様に、心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2012）発達障害を対象とする通級指導教室における支援の充実に向けた実際的な研究－「発達障害を対象とした通級指導教室の基本的な運営マニュアル（試案）」の作成に向けて－，研究成果報告書。

- 樋口功季・林田真志・河原麻子・新海晃 (2021) 公立小学校における「障害に関する授業」の実施状況と課題－担当教員に対する質問紙調査を通して－, 特別支援教育実践センター研究紀要, 19, 1-12.
- 平岡彰代・小野尚香 (2020) 中学校通級指導教室における取組と課題－先行研究論文の紹介－, 畿央大学紀要, 17 (1), 23-38.
- 今西満子・玉村公二彦 (2010) 奈良市におけるLD通級指導教室の現状と指導の展開, 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 19, 167-172.
- 石田祥代・北島善夫・宮寺千恵・真鍋健 (2019) 学校教育の各現場で求められる特別支援教育の今日的な課題－その1－, 千葉大学教育学部研究紀要, 67, 97-103.
- 伊藤由美・柘植雅義・梅田真理 (2015) 「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の補足調査の結果からみた通級指導教室の役割と課題, 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 42, 27-39.
- 松本くみ子・石崎朝世・田中哲 (2019) インクルーシブ教育システム構築に向けた校内支援体制の充実への期待－医療関係者への質問紙調査から－, 児童青年精神医学とその近接領域, 60 (1), 124-136.
- 文部科学省 (2024) 令和5年度特別支援教育体制整備状況調査結果, https://www.mext.go.jp/content/20241107-mxt_tokubetu02-000037897_2.pdf (2025年12月6日閲覧).
- 文部科学省 (2018) 障害に応じた通級による指導の手引き－解説とQ & A－, 海文堂.
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 (2020) 初めて通級による指導を担当する教師のためのガイド, <https://www.mext.go.jp/tsuky-gu/guide/> (2025年12月6日閲覧).
- 奈良県教育研究所 (2019) 通級を設置するに当たって (準備すること)－奈良県の通級の先生と共に子どもの学びに活かすハンドブッカー, <https://www.pref.nara.jp/secure/46267/tuukyuhb-5.pdf> (2025年12月6日閲覧).
- 二宮信一 (2021) へき地における特別支援教育の課題と展望, 教育学の研究と実践, 15, 41-50.
- 大塚玲・石田元美 (2013) 静岡県における発達障害を対象とした小学校通級指導教室の現状と課題, 静岡大学教育学部研究報告人文・社会・自然科学篇, 63, 55-70.
- 大塚玲・大川純子・清水直子・石川誠 (2017) 発達障害児を対象としたサテライト方式の通級による指導の取り組み, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 26, 217-225.
- 佐々木朋広・武田篤 (2012) LD等を対象とした中学校通級指導教室の現状と課題－中学校通級指導教室を担当する教員へのインタビュー調査から－, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 34, 81-91.
- 笹森洋樹・大城政之 (2014) Q & A と先読みカレンダーで早わかり! 通級指導教室運営ガイド, 明治図書出版.
- 杉瀬康仁・川崎聡大 (2014) 富山県の通級指導教室の現状と課題, とやま発達福祉学年報, 5, 21-24.
- 杉浦菜実・武田鉄郎・尾崎由美子・増田伸江 (2019) 発達障害のある児童生徒の二次障害に関する研究－通級指導教室の教師への聞き取りを通じた質的分析－, 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学, 69, 1-6.
- 山本有巳日・小野次朗 (2013) 通級指導教室と通級児在籍学級との連携について, 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 63, 59-66.
- 安里健志 (2024) 小学校における障害理解教育に関する課題の実践的探求 I－通級指導の体験学習を中心とした障害理解教育の実践から－, 障害理解研究, J25, 1-15.
- 横山直子・武田篤 (2015) 中学校通級指導教室に対する校内職員の理解啓発のあり方の検討－通級指導教室の授業公開の実践－, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 37, 141-147.